

第2回 第4次京都市子ども読書活動推進計画策定会議 摘録

<主な意見（要旨）>

【妊娠期・乳幼児期】

- ・妊娠期の方のほうが、比較的、出産後の方よりも時間に余裕があることと、読み聞かせを受け入れやすい傾向にあると思われる。
- ・妊娠期の方への取組として、母子健康手帳の配布の際やプレママ・パパ講座等で、読み聞かせの重要性を説明する機会を設けるなど、充実させていくことはできないか。
- ・妊娠期の方も、出産後の方を対象としている「子育て講座等」に参加できるような環境作りができると良い。
- ・母親は子育てが忙しく、読み聞かせも必要だと言われると負担に感じてしまう恐れがあるため、父親が子どもと遊ぶツールとして読み聞かせを活用できたら良い。

【小・中学生】

- ・現状として、朝読書でしか本を読んでいる生徒がいる。
- ・読書感想文や読書ノートに記入することなどばかり課題にしていると、本を読まなくなる原因の1つとなる。ポップ作りやビブリオバトルなど、本を読んだ経験を様々な形で表現できるように工夫することが必要である。
- ・小学生の時に、週1回の授業でクラスメートの前で読み聞かせした経験があるが、本に触れる機会が増えて良かったと思う。
- ・小中学校が行った、分類番号ごとに本を仕分けしたことは、目的の本以外の本にも触れる機会が増えて、興味関心の幅が広がり、良いと思う。
- ・中学校の図書館は、開館時間が短く、活用されにくいという課題が以前からある。
- ・授業を図書館内で行い、学校図書館を活用するという方法を取っている教員もいる。
- ・ある中学校では「将来自分の子どもに読み聞かせができる生徒に育てよう」と目標に掲げ、小学校低学年の子に読み聞かせを行った。また、中学校3年生の家庭科では、保育園の子どもたちへ絵本を贈る授業を行っている。
- ・中学生の時期は、小学生への読み聞かせなど、読書の大切さに気付く取組を推進することが大切である。

【高校生】

- ・「読書」の定義をどのようにとらえるのかによって不読率が変わってくる。また、探究活動などで分厚い本を、必要に応じて部分的に読んでいる生徒は多いと思う。そのため、一概に不読率が高いとは言えない。
- ・学校によって必要な本の種類や設備が様々なので、各校ごとに対応していく必要がある。
- ・また、高校だけに限らないが、近くの公共図書館と協力して、選書や学校図書館の更なる活用方法について話す機会があると良い。(塔南高校実施の例)

【その他】

- ・認定こども園などについても計画の対象に含めたほうが良いと思うので、現在の計画内の「学校及び幼稚園・保育所・・・」の項目に、「等」を付けるなど、限定されない表記にするほうが良い。
- ・高校生のアンケートを見ていると、公共図書館で借りる生徒も見られるため、中高生の割合を増やす取組を引き続き進めていく必要がある。
- ・福知山市の公共図書館のように、カフェやパン屋などが入った複合施設にすることで、来館する方の多様なニーズに対応することができないか。
- ・書店内では特別な技能がないと読み聞かせをしてはいけないという雰囲気があり実施できていないがところも多いが、そのような雰囲気を変えていく必要があるかと思う。
- ・読書が義務的なものにならないように、課題としてだけではなく、自主・自発的に読書をするように促すことが大切である。

< 発言詳細（発言順） > ※敬称略

上田： 第3次計画の項目の中には、「妊娠期も含めた保護者に、絵本・児童書の読み聞かせの重要性を知らせる各種取組の充実」とあるが、実際に妊娠期で保護者に対する取組というのは、母子健康手帳とあわせて渡す「赤ちゃんといっしょ」という冊子の中で読み聞かせについて触れていることが主である。

一方で、8か月健診のブックスタート事業で絵本を提供することや、中学校の家庭科で保育園や幼稚園の幼児と交流する機会があり、その中で、乳幼児と絵本を活用して触れ合っている。そのような、取組の充実が大切と考えている。

また、他の項目で「学校及び幼稚園・保育所における子どもの読書活動の推進」とあるが、認定こども園など他にも該当する施設が増えているので、「等」を付けるなど、限定した表記にならないようにした方が良くと思う。

鈴木： 私たちの団体で今一番考えていることは、妊娠時期の保護者にどのように絵本の重要性を伝えることができるかである。出産した直後では、忙しいことや絵本を読んでも反応を示さないなどの理由で、受け入れられないことが多いため、妊娠期の方が受け入れられやすいと思う。先ほどの話の中にあつた母子手帳交付の際に、冊子を渡すだけではなく、その場で絵本の重要性について説明する人が必要なのだと思う。

上田： プレママ・パパ教室などで絵本の大切さについても伝えていくことができたと思う。

細(彌)： 私の経験となるが、夫は子どもに対して、冊数は少なかったかもしれないが、頻繁に読み聞かせをしていたと思う。母親は忙しい育児の中で、読み聞かせもしなければならぬと言われると、負担に感じる方が多いと思う。父親が子どもと遊ぶツールとして活用できたら、うまく分担できてよいのではと思う。そのことについて、何かアプローチできることがないかと思う。

池田： 当園では未就園児を持つ保護者向けの講座を行っている。そこには、妊娠期の方も参加している。出産後の方は時間がなく忙しいように思うが、妊娠期の方は比較的時間に余裕があり、当園では将来的に子どもに読ませたい絵本を選んで、お腹の中の子に向かって読みかきかせを行っている。このような妊娠中の方が、子育て講座に参加できるような環境づくりが重要だと考えている。

小野： 高校生の不読率については、「読書」をどうとらえるのかによって変わってくるのかと思う。探究活動の中で参考文献を借りたり、分厚い本を必要に応じて少しずつ読んだりしていることを含めずに回答している可能性もあるので、一概に不読率が高いとは言えない。

学校図書館の分類番号ごとに仕分けをすることは、分類分けして置いておくことで、目的の本以外の本にも触れる機会が増えて、興味・関心の幅が広がる可能性があり、良いと思う。

また、市立高校の学校図書館の設備環境については、学校ごとに様々なので、必要に応じて設備を改善する必要があるかと思う。

矢野： 以前勤務していた学校では、目的を「将来自分の子どもに読み聞かせができる生徒を育てよう」として、図書委員会を中心に、ビッグブックを購入して、小学校低学年の子に読み聞かせを行った。すると、小学生が目を輝かせて聞く姿をみて、中学生は達成感を感じていい経験となった。

また、家庭科の授業では中学3年生が保育園の子どもたちに贈る絵本を作成している。中学生の時期は、読書に対する大切さに気付く時期だと思うので、そのような取組が広がることが大切である。

谷： 読書は習慣にすることが大切だと思うが、現状として朝読書でしか読んでいない子が少なからずいる。その原因の1つとして、忙しさの二極化がある。例えば休日では、習い事や勉強でかなり忙しい子もいれば、特に何も予定がない子もいる。そのような子らに対して、どのような取組が良いのかを考える必要がある。

また、読書をすれば読書感想文や読書ノートを書かないといけないというイメージがあり、それも本を読まなくなる原因のひとつかと思う。読んだ後のアウトプットを感想文だけではなく、ビブリオバトルやポップ作り等があり、自分の読んだ経験が様々な形で広がっていくということを周知することが大切だと思う。

福知山市の公立図書館ではまさに「コンビニ」のように、様々なジャンルの本が置いていることや、くつろげるスペース、カフェやパン屋などがある複合施設となっている。図書館に来る人の多様なニーズに対応していくことで、図書館の利用も高まるのではないかな。

吉岡： 私自身が小学生の時に、週に1回授業で他のクラスメートの前で読み聞かせを行ったことを思い出した。本について触れる機会にもなるし、人前で話すことについても良い経験となった。

犬石： 書店内での読み聞かせを行っているところはなかなか少ない。特別な技能がないとしてはいけないという雰囲気があり、できていないところがある。書店としても、その雰囲気を変えていく必要があると思う。

学校の蔵書について、感覚的に絵本・文学が多く、調べ学習系の本が少ないような気がするが、学校図書館ではどのような基準で司書の方が選書をしているのかお聞かせ願いたい。

事務局： 学校指導課に図書館担当の専門主事がいる。その専門主事が全校訪問して、司書と面談をしたり、蔵書のデータをもとにアドバイスをしたりしている。

小野： 高校は学校ごとに予算の範囲内で、教員や生徒の要望に基づいて購入している。また、本校では地域図書館が近くにあり、生徒が探究活動で利用している関係で、図書館からお声掛けを頂戴して、購入図書のリクエストをさせていただいてもある。こういった連携は大変有難い。

谷： 先ほどの事務局からの補足になるが、学校図書館のボランティアの方の意見も参考にして、選書を行っている。

和田(裕)： 日頃から京都市では読書環境を充実していただき、感謝している。

幼稚園では読書の取組が多かったのも、子が本を読んできた。

一方で、小学生では100冊マラソンなど、義務的に感じてしまうことが多いのかと思う。読書をするのは義務ではなく、権利であると思うので、自主自発的に家庭で読むように促すのはどのようにすればよいか模索しているところである。

また、中学生の子を持つ親として、高校生の不読率については、アンケートの結果の通り、忙しいために読むことが少なくなっていると思う。

下村： 小学校の頃の学校図書館では、絵本や小説などが多かったが、高校になると、知識を得るために必要な本が多いため、本を楽しむということよりも勉強のために使用していたという印象がある。

佐藤： 谷委員の御意見の通り、感想文以外の方法でも本を読んだ経験を活かせることができないかと思う。

学校図書館についてだが、中学校の図書館は、開館時間が短く、活用されにくいという課題が以前からある。そのような中、最近では授業を図書館内で行い、活用するという方法をとっている教員もいる。また、教員自身が学校図書館のことについて、知っておく必要もあるかと思う。

向井： 公共図書館では、乳幼児期の子どもたちに対して、ブックトークや読み聞かせなど様々な取組を行っている。また、小中学校の学校司書に対して、読み聞かせやブックトーク、ビブリオバトルの研修を実施している。従来の公共図書館では無い、京都サングの選手や吉本興業の芸人に図書館に来てもらい、講演を行うなど取組を進めている。

また、高校生のアンケートを見てみると、公共図書館で借りている生徒もいるので、中高生の割合を増やす取組を続けていきたい。同じアンケートでは、電子書籍を活用している割合も高いので、高校生のニーズが一定あるのではないかと思う。

春田： 量より質、発達段階に応じた取組、それに関わる学校・地域・公共図書館について様々な御意見をいただいた。本日、いただいた御意見をもとに素案作成を進めてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

<参考>

○日時・会場

平成30年9月28日（金）10：00～12：00
京都市総合教育センター 地下1階 第3研修室

○参加者

岩崎 れい（京都ノートルダム女子大学教授）、和田 弥恵子（市民公募委員）、
下村 美友（市民公募委員）、犬石 吉洋（京都府書店商業組合理事長）、
鈴木 美和（京都市子ども文庫連絡会代表）、
和田 裕美子（京都市私立幼稚園PTA連合会会長）
吉岡 恵（京都市PTA連絡協議会常任理事）、
池田 岩太（京都市保育園連盟常任理事）
谷 武彦（京都市小学校図書館研究会会長）、
矢野 保美（京都市立中学校教育研究会図書館教育部会会長）
小野 恭裕（京都市立塔南高等学校長）、
上田 廣久（子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部長）、
佐藤 卓也（教育委員会総合教育センター所長、指導部長事務取扱）、
春田 寛（教育委員会生涯学習部長）、
向井 宏明（教育委員会生涯学習部担当部長） 等

